

提携校マレーシア、サバ大学の 日本語学習者との交流の可能性

林 奈緒子 共同研究員

和光大学はマレーシア、サバ大学と提携校の関係にあるが、両校の学生同士の交流は、継続的におこなわれているとはいいいがたく、発展・深化の可能性を残している。今後どのような交流の可能性が考えられるかを探る目的で、サバ大学で学ぶ日本語履修者にアンケート調査を実施した。この結果および日本語担当教員へのインタビューをもとに、学生間の交流の第一歩としての選択肢の1つを提案することを試みた¹⁾。

1 ―― はじめに

和光大学では、マレーシアのサバ大学と2006年に提携が結ばれて以来、これに基づいて主に教員間の相互交流がおこなわれている。また経済経営学部の学生が、授業の一環として毎年フィールドワークを目的にマレーシアを訪れており、その際にサバ大学の学生と交流の機会をもっている。これを契機に学生同士が交流を深め、継続していくことも可能ではあるものの、帰国後の交流に結びつくかどうかは個人に委ねられる部分が大きく、提携校であることを活かした継続的な交流につなげていくことは難しい。事実、サバ大学の日本語履修者を対象としたアンケート調査で、和光大学とサバ大学が提携校であることを知っているかを尋ねた質問に対して、47人中45人が「知らなかった」と回答している²⁾。

大学間の学生交流のあり方としては、田崎（1998）にあるように、専攻を同じくする学生が、その専門分野による動機づけによって交流を深めるという方法も考えられる。また一方では、日本語や日本文化、あるいは逆に提携校の国で話されている言語やその文化を媒介とした交流も考えられよう。ここでは、サバ大学

1) 本稿は、和光大学総合文化研究所研究プロジェクト「短期留学生の日本適応能力向上についての研究」として実施した調査をまとめたものである。

2) 文末に挙げた質問紙によるアンケート調査、「質問17 あなたは、サバ大学と日本の和光大学が提携校（姉妹校）であることを知っていましたか。1つ選んで○をつけてください。」に対する回答。

で日本語の授業を履修する日本語学習者へのアンケートおよび日本語教育担当教員へのインタビューをもとに、日本語、日本文化を媒介とした和光大学、サバ大学両校の継続的な交流の可能性を検討する。

2——調査の目的と方法

サバ大学で日本語を履修する学生との、日本語、日本文化を媒介とする交流が可能であるかを探るために、以下の2点を目的に調査を実施した。

①サバ大学における日本語教育の内容とカリキュラムにおける位置づけを明らかにする。

②日本語履修者の学習動機や目的、交流に対する意識を明らかにする。

この目的の下、以下の方法で調査を実施した。

③サバ大学日本語担当教員へのインタビュー

実施日：2011年3月11日

実施方法：事前に渡した質問項目に基づくインタビュー

④日本語履修者を対象としたアンケート調査

実施日：2011年3月12日

実施対象：サバ大学で日本語を履修している学生、47名

(実施日に授業に出席していた学生)

実施方法：質問紙によるアンケート調査³⁾

日本語履修者を対象としたアンケート調査は、上述目的の②を明らかにするために実施したものである。一方、日本語担当教員へのインタビューは、目的の①を明らかにすると同時に、短期留学を通じた学生交流が可能か、難しいとするならば何が障害となるかなど、今後の交流の方向性を探ることを意図したものである。

日本語履修者を対象としたアンケート調査は、調査当日おこなわれていた2クラスの授業終了後に協力してもらったものであるが、クラスの中に入って授業を見学し、学生がどのような雰囲気ですべてを受けているのか、その様子を実際に見せてもらう機会ともなった。

3——日本語教育の内容と位置づけ

サバ大学では、日本語を主専攻としている学生はおらず、日本語の授業を履修しているのは、日本語を副専攻とする社会科学部国際関係学科の学生、および外国語科目として日本語を選択している学生のみである。以下、副専攻としての日

3) 調査に使用した質問紙を文末に資料として掲載する。

本語クラスと外国語としての日本語クラスの順に、その内容と特徴について、概観しておきたい。

副専攻としての日本語クラス

社会科学部国際関係学科の学生は、必須科目である英語以外に、選択必須科目として日本語、中国語、アラビア語のうち1科目を選択する。学生の希望をとった上で、大学側が人数の偏りが出ないように調整をおこなうため、例年60人の学生のうち20人が日本語を学ぶこととなる。もっとも人気があるのは中国語であり、日本語を学ぶ学習者すべてが希望して日本語を学んでいるわけではないという。

日本語を副専攻とするこの授業では、*Japanese for Busy People*（国際日本語普及協会）を使って、2年間で合計98時間日本語を学ぶ。大学の授業のみでは日本語能力試験への合格が難しいため、日本語担当教員が用意したN5レベルを想定した試験対策教材を使って自習をおこなう学生もいるが、2005年の日本語クラスの開講以来、日本語能力試験の受験者は10人に満たない。

外国語科目としての日本語クラス

サバ大学では、英語が第1外国語に指定されている。第1セメスター（1年次の前期）には全学生が英語を学び、セメスター終了時に試験が実施される。これに合格しなければ、第2外国語の履修が許されず、在学中は英語のみを集中的に学習することになる。

一方、この試験に合格した学生は、日本語、中国語、フランス語、スペイン語、ロシア語、アラビア語、マレー語、タミル語、カダザン・ドゥスン語の中から1つを選択して履修する。第2外国語として履修する外国語は、学生の希望を聞いた上で人数調整をおこなって決定される。2010年入学の1年生の場合、全体の約1割、468名が日本語を選択している。上述9言語に加えて、次のセメスターから韓国語が新たに開講される予定であった。これは韓流ドラマや韓国の若者文化に対する関心をもつ学生からの要望を受けて実現したものであるが、日本語選択者の学習動機も日本の若者文化に対する関心によるところが大きく、両者には重なるところがあるという。実際、日本語クラスの履修者を対象としておこなったアンケートでも、学習動機を複数選択

表1 「話す技能」に対する満足度

	N=人数
1 満足している	0
2 やや満足している	17
3 あまり満足していない	24
4 満足していない	6
合計	47

（「質問11 現在の自分の『話す力』に満足していますか。1つ選んで○をつけてください。」に対する回答。）

表2 「聞く技能」に対する満足度

	N=人数
1 満足している	0
2 やや満足している	24
3 あまり満足していない	22
4 満足していない	1
合計	47

（「質問12 現在の自分の『聞く力』に満足していますか。1つ選んで○をつけてください。」に対する回答。）

してもらふ質問に対して、回答者47名のうち27名（約57%）と半数以上の履修者が選択肢「日本文化に関する知識を得るため」を選んでいる。

第2外国語としての日本語の授業では、『みんなの日本語 初級Ⅰ』（スリーエーネットワーク）を使って授業がおこなわれており、2年次の第4セメスター終了までに13課まで学ぶことになっている。会話を中心とした授業のため、「書く技能」「読む技能」よりは「話す技能」「聞く技能」に重きを置いた授業構成となっているようである。

第2外国語として日本語を学んでいる学生の中にも、日本語能力試験N5レベルを受験する学生が見られ、前年度は全履修者の約2割の学生が受験している。副専攻として日本語を履修している学生の場合と同様、受験者には試験対策教材を使った指導がおこなわれている。

アンケート調査当日に、第2外国語としての日本語の授業を見学する機会をえたが、ペアワークなどを交えながら進められる授業はとても楽しい雰囲気中で、学生の反応もよく、積極的に学習が進められている様子がうかがわれた。授業見学に入っていた私に対しても、学習中の文型を利用した質問が出る場面もあった。このことは、履修者を対象に実施したアンケートの結果にも反映されているかと思う。

アンケートへの回答を依頼したのは、1年次の第1セメスターにあたるクラスで『みんなの日本語 初級Ⅰ』の3課を学ぶ、日本語の学習を始めたばかりの学生であった。理解、使用ともに、語彙、文型が限られているにもかかわらず、現在の自分の日本語能力に対する満足度を尋ねた質問において、選択肢「4. 満足していない」を選択する履修者は思いのほか少ない（表1～表4）。

4——日本語履修者を対象としたアンケートの結果

では、今後サバ大学で日本語を学ぶ学生との交流の方向として、どのようなものが考えられるだろうか。アンケートの結果を集計し、そこに見出される特徴をまとめてみた。まずは、学習動機について確認してみたい（図1）。

最も多いのが「10.日本語という言語そのものに興味があるから」の34名。回答者47名の約72%がこれを選択している。2番目は「8.日本に観光旅行するため」（30名、64%）、3番目は「2.日本の文化に関する知識を得るため」（27名、

表3 「読む技能」に対する満足度

N=人数	
1 満足している	0
2 やや満足している	30
3 あまり満足していない	16
4 満足していない	1
合計	47

（「質問13 現在の自分の「読む力」に満足していますか。1つ選んで○をつけてください。」に対する回答。）

表4 「書く技能」に対する満足度

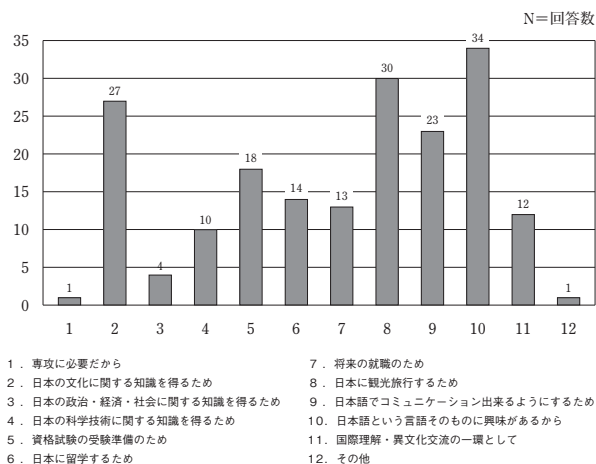
N=人数	
1 満足している	1
2 やや満足している	25
3 あまり満足していない	18
4 満足していない	3
合計	47

（「質問14 現在の自分の「書く力」に満足していますか。1つ選んで○をつけてください。」に対する回答。）

57%)であり、さらに「9.日本語でコミュニケーション出来るようにするため」(23名、49%)、「5.資格試験受験のため」(18名、38%)と続く。日本語そのものに対する関心から日本語を学習している学習者が多いことはサバ大学に限った傾向ではない。国際交流基金によって2009年に実施された海外日本語教育機関調査の結果においても、学習動機として選択肢「日本語そのものへの興味」は2番目に多く選ばれている⁴⁾。国際交流基金による調査の結果と比較して、サバ大学の日本語履修者の特徴として挙げられるのは、選択肢「8.日本に観光旅行するため」を選んだ者が2番目に多いということであろう。「2.日本の文化に関する知識を得るため」「9.日本語でコミュニケーション出来るようにするため」を選択した履修者も多いことから、日本文化や日本人との接触に対する志向が強く読み取れる。

一方で、サバ大学の日本語履修者が日本語を使ってコミュニケーションを図ったり、その結果として日本の文化・習慣に触れる機会はそれほど多くないようである。サバ大学のあるサバ州コタキナバルの中心街には、日本人観光客向けの土産物店などもあり、日本語履修者が日本人と接する機会が得られないわけではない。しかし、インタビューに答えてくださった日本語担当の先生によると、大学が街の中心から離れているため、普段は大学周辺で生活する学生が日本語を使ってコミュニケーションを図る機会はあまりないという。それでも、授業以外でどのくらいの頻度で日

図1 日本語履修者の学習動機



(「質問8 日本語を学んでいる理由として、当てはまるもの全てに○をつけてください。」に対する回答。)

注：なお、この質問では最も当てはまる選択肢に◎をつけることを求めたが、選択した回答のいずれにも◎をつけていない回答者がほとんどであり、ここでは単純に回答の延べ数を示した。

4) 今回のアンケート調査における質問8の選択肢は、国際交流基金による2009年の海外日本語教育機関調査の選択肢と完全に一致するものではない。国際交流基金の調査は、初等教育機関から高等教育機関、民間の日本語教育機関をも対象に広く実施されているものである。今回サバ大学で実施したアンケート調査では、対象機関の性質などを加味し、独自の選択肢を設けた。国際交流基金の調査によると、マレーシアの高等教育機関で学ぶ日本語学習者の学習動機は、その割合が高い順に「コミュニケーション」、「日本語そのものへの興味」「将来の就職」「アニメ・マンガ等に関する知識」「受験準備(大学等)」となっている。

本語を使うかを尋ねた質問には、47人中3人が「ほぼ毎日」、31人が「週に数回」と回答している(表5)。これは、今回のアンケート調査の実施が、和光大学経済経営学部の学生の滞在期間と重なったことが影響しているとも考えられる⁵⁾。「5.ほとんど使わない」と答えた履修者が全体の約1/4に上ることも、注目に値する。

また、誰を相手に日本語を使用しているかを尋ねた質問からは、「1.日本語の授業で、クラスメートや先生と」話すと答えた履修者が圧倒的に多く、日本語履修者が普段の生活で日本語を使う機会は限定的であると見ることができる(表6)。

そんな日本語履修者に、日本に留学する機会が得られれば何を学んでみたいか、どんな経験をしてみたいかを尋ねた(図2)。最も多いのが「7.日本人学生との交流」、ほぼ同数で「4.日本の科学技術に関する知識や経験」、「2.日本の文化に関する知識」がこれに続く。また、「5.日本の企業における研修やインターンシップ」「8.地域住民との交流」を選択した回答者もかなりの程度いる。

これらの回答を専攻別にまとめたものが次の図3である。この結果から、2つの傾向が見てとれる。1つは、選択肢「1.現在の専攻に

表5 授業の外での日本語の使用頻度

	N=人数
1 ほぼ毎日	3
2 週に数回	31
3 月に数回	1
4 年に数回	0
5 ほとんど使わない	12
6 その他	0
合計	47

(「質問10 現在、日本語の授業以外の場でどのくらいの頻度で日本語を使いますか。1つ選んで○をつけてください。」に対する回答。)

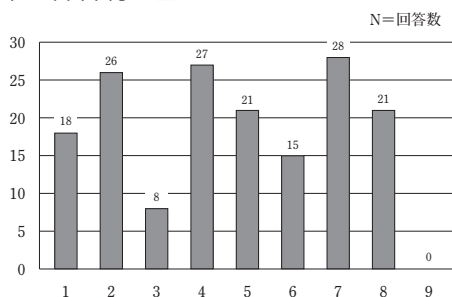
表6 誰を相手に日本語を使用するか

	N=回答数
1 日本語の授業で、クラスメートや先生と	46
2 大学の日本人留学生と	12
3 近隣に住んでいる日本人と	3
4 日本人観光客と	5
5 その他	1
合計	67

(「質問9 現在、誰を相手に日本語を使いますか。当てはまるもの全てに○をつけてください。」に対する回答。)

注:「2.大学の日本人留学生と」を選択している回答者が12名いるが、サバ大学には、日本からの留学生はほとんどおらず、日本語履修者が日本人留学生と接する機会があるとは考えにくい。先に触れた和光大学から短期滞在している学生、早稲田大学の学生ボランティアのことを指しているものと考えられる。)

図2 日本留学に望むもの



1. 現在の専攻に関する知識や経験
2. 日本の文化に関する知識や経験
3. 日本の政治・経済・社会に関する知識や経験
4. 日本の科学技術に関する知識や経験
5. 日本の企業における研修やインターンシップ
6. 日本語能力向上のための講座
7. 日本人学生との交流
8. 地域住民との交流
9. その他

(「質問15 日本に留学する機会があれば、どんなことを学んでみたい(経験してみたい)と思いますか。」に対する回答。)

注:質問8同様、この質問では最も当てはまる選択肢に○をつけることを求めたが、選択した回答のいずれにも○をつけていない回答者がほとんどであり、ここでは単純に回答の延べ数を示した。

5) これとは別に、早稲田大学の学生ボランティアがコタキナバルで継続的に活動をおこなっており、中には彼らと接する機会がある回答者もいるのかもしれない。

関する知識や経験」、あるいは自らの専攻にかかわる選択肢を選んで履修者が多いことである。例えば、Science & Technology を専攻する学生は、選択肢「4.日本の科学技術に関する知識や経験」を選択する履修者が最も多く、選択肢「1.現在の専攻に関する知識や経験」を選んだ履修者をあわせると、延べ回答数の約32.1%となる。選択肢「3.日本の政治・経済・社会に関する知識や経験」を最も高い割合で選択しているのは Business & Economics を専攻する履修者であり、選択肢「1.現在の専攻に関する知識や経験」を選んだ履修者をあわせると、延べ回答数の約22.2%となる。選択肢「1.現在の専攻に関する知識や経験」を選択した割合が最も高いのは Food Science & Nutrition を専攻する履修者であるが、専攻に直接的に関わる選択肢が他になかったためであると考えられる。延べ回答数の約16.7%がこれを選択している。

また2つめの特徴として、専攻に関わりなく、選択肢「2.日本の文化に関する知識や経験」「7.日本人学生との交流」「8.地域住民との交流」が高い割合で選択されているということである。

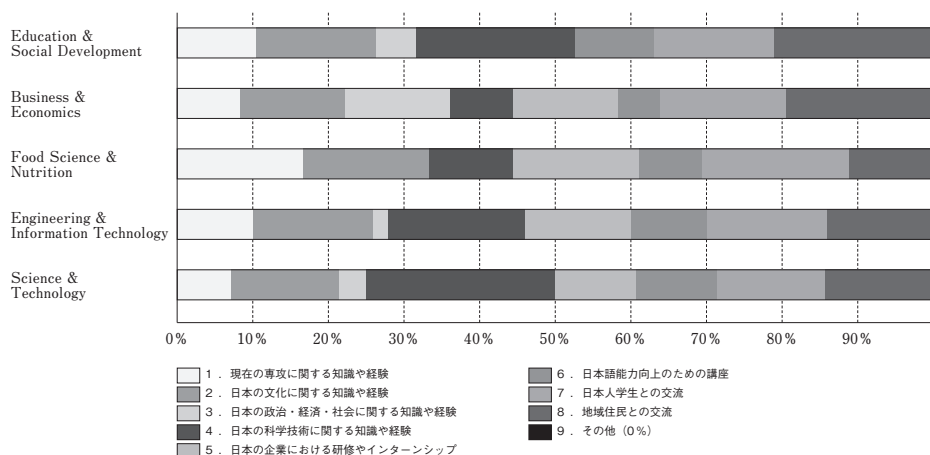
以上のアンケート集計結果から、サバ大学の日本語履修者について以下の2点が指摘できそうである。

⑤日本人学生をはじめとする日本人との交流を通じて、日本の文化・生活について知ることを望んでいるが、実際に日本人とコミュニケーションを図る機会はそれほど多くない。

⑥日本人とのコミュニケーション・交流に対する志向とは別に、自らの専門分野に関する知識や経験を深めることを望んでいる。

以上をふまえ、以下で今後の交流の可能性について考えてみたい。

図3 日本留学に望むもの（専攻とのクロス集計の結果）



5 ― 今後の交流の可能性

提携校との間での学生同士の交流の方法として、短期留学生として提携校で学ぶ方法や、授業の一環として提携校を訪問するという方法がまず考えられる。実際に、和光大学からは毎年経済経営学部の学生が2週間程度マレーシアに滞在し、その中でサバ大学の学生とも交流を図っている。サバ大学の日本語履修者にも、双方の学生が留学などの形で直接交流すること、さらには留学をつうじて自らの専門分野に関する知識・経験を深めることを望む声が圧倒的に多い。和光大学に望むことは何かを尋ねた質問に対して、45人が「サバ大学から和光大学への留学生の受け入れ」を、24人が「和光大学からサバ大学への留学生の受け入れ」を選択している（表7）。しかしながら、サバ大学の学生を日本に迎えることは現実にはなかなか難しいようである。インタビューをおこなったサバ大学の日本語教育担当の先生によると、学生個人が日本滞在の費用を負担することが困難だけでなく、大学からの資金的な支援も今のところ望めないという。これは日本への留学に限ったことではなく、外国への留学を希望する学生は奨学金を受けるなど自分自身で留学への道を切り開かなければならず、実際に海外に留学する学生数も極めて少ないという。事前をお願いした日本語教育を担当されている先生を対象としたアンケートでは、担当者の確保が難しいこと、留学期間中の欠席および単位認定に関わる問題など、留学生として学生を送り出す上での課題が挙げられていた。

これ以外に配慮すべき問題として、サバ大学の日本語履修者の日本語能力が挙げられよう。和光大学では2001年度から2010年度までの10年間、提携校である上海大学から特別聴講生として毎年留学生を迎えてきた。上海大学特別聴講生は、10ヶ月あまり和光大学に在籍し、日本語講座で日本語を学びながら様々な授業を履修して帰国した。また日本語能力試験への合格も、彼らの在学中の目的の1つであった。その日本語能力は、中級後半から上級レベルであり、日本語による授業を聴講し単位を取得することにも、大きな問題は伴わなかった。一方で、サバ大学の日本語履修者の日本語能力は第4セメスター終了時であっても初級前半レベルにあり、彼らが和光大学で専門知識を深めるために授業を履修するには、和光大学側に英語で授業をおこなうなどの対応が求められる。これは、授業の履修、単位取得に限らず、日本人学生、地域住民との交流についても共通した課題であ

表7 日本語履修者が和光大学に望むこと

	N=回答数
1 サバ大学から和光大学への留学生の受け入れ	45
2 和光大学からサバ大学への留学生の受け入れ	24
3 和光大学からの日本に関する情報の提供	14
4 E-mailなどを利用した和光大学の学生との交流	15
5 特に何も望まない	1
6 その他	0
合計	99

（「質問18 提携校である和光大学に望むことは何ですか。当てはまるもの全てに○をつけてください。」に対する回答。）

るが、英語を媒介語とした交流は、日本語で日本人学生、地域住民とのコミュニケーションを図りたいというサバ大学の日本語履修者の希望に沿うものとはいえない。

では、短期の留学や滞在以外の方法で、学生同士が交流を図る方法はないだろうか。

先に言及したとおり、和光大学に望むことは何かを尋ねた質問に対して、留学生の受け入れといった学生の直接的な交流の機会を望む声が多い。しかしながら、今回のアンケートで14人が「3.和光大学からの日本に関する情報の提供」を、15人が「4. E-mailなどを利用した和光大学の学生との交流」を選んでいる。では、日本語履修者はどのような情報を求めているのであろうか。選択肢「3.和光大学からの日本に関する情報の提供」について、具体的にどんな情報がほしいかを記入してもらったが、“Qualification to further my study in Wako University and courses that offered by Wako University (和光大学で学んだ場合の単位認定や和光大学で開講されている授業について)”といった将来の留学を想定した具体的な情報を求める意見もあれば、“Information about technology in Japan (日本の技術に関する情報)”といった漠然とした希望、さらには“Study lifestyle of Japanese in Japan. (日本人の学生生活について)”までさまざまである。日本語履修者から寄せられたこうした希望の多くは、ひじょうに意外なものであった。滞在時の交流パーティに参加していた学生たちは、ほぼ全員が携帯電話やスマートフォンなど携帯端末をもっており、インターネットの普及状況を鑑みても、日本や和光大学に関する情報が得られないということは考えられない⁶⁾。実際のところ彼らが望んでいるのは、得られる情報そのものというよりは、日本人学生をはじめとする日本人との交流をつうじて日本に関する情報を得たという体験だとは考えられないだろうか。

ここまで見てきたとおり、短期の留学、滞在には乗り越えるべき課題も多いが、市川(1997)、鈴木(2006)に見られるように、インターネットを利用した情報交換、交流であれば、気軽にはじめることができ、やり方次第では継続的な交流にもつなげやすい。以下で、その方法と内容について考えてみたい。

まず内容であるが、サバ大学の日本語履修者の学習動機を尋ねる質問で多くの日本語履修者が選択し、日本に留学する機会があれば学んでみたい(経験してみたい)と希望している、以下の2つが挙げられよう。

⑦日本文化に関する情報

日本の文化、習慣から、アンケートの自由記入欄に希望があった、同世代の若者の学生生活など。

⑧それぞれの学生の専攻に関する情報

学内で開講されている授業についての情報をはじめ、専門分野に関する

6) 和光大学も、ホームページ上で英語、中国語および韓国語による情報提供をおこなっている。

幅広いやり取り。

いずれの場合も、和光大学の学生が、マレーシアの文化、サバ大学の学生の学生生活について、サバ大学で開講されている授業や、マレーシアでのそれぞれの専門分野での動向について尋ねることも、想定される。また、交流が進めば、上述以外の内容が取り上げられることも当然考えられようし、日本語履修者との交流ということであれば、日本語そのものに関する質問、それに対する回答というようなやり取りがおこなわれることもあるだろう。方法としては、鈴木（2006）のようにWebカメラを設置しての交流、IP電話を利用した交流も可能ではあるが、以下の理由から実現には時間を要すると思われる。

⑨媒介語の問題

先に触れたとおり、サバ大学の日本語履修者の日本語能力を考えた場合、日本語を媒介語とした対面でのコミュニケーションは難しいだろうと判断される。日本語履修者の多くは、日常生活で英語を使用しており、英語を媒介語とすればコミュニケーション上の問題はないが、今度はこの交流に参加できる和光大学の学生が限られてしまうことが懸念される。また、アンケートの結果から、日本語履修者は日本語でのコミュニケーションを望んでいると考えられるため、英語による交流では、その希望を十分にくみ取ることができない。

⑩交流の場の問題

円滑な交流を実現するためには、少なくとも交流開始当初は、授業の場などでやり取りが進められることが理想的であるが、現状としては難しい。以上を考えあわせると、対面でのコミュニケーションによって期待される効果は大きいものの、電子メールなどを利用した文字言語による交流の方が、現状に即していると判断できる。文字言語による交流の利点を、いくつか挙げてみたい。

⑪タイムラグはあるものの、双方で情報の送り手、受け手となることができ、学生同士の直接的な交流と位置づけることができる。

⑫対面によるコミュニケーションでは、発話の場で即座に反応することが求められるが、文字言語によるコミュニケーションであれば、日本語履修者の日本語能力にあわせた情報発信がおこないやすい。

⑬交流参加者がそれぞれに分担を決めて、文書を作成し送信するといった形をとれば、授業外の活動として継続していく道も開かれる。

和光大学表現学部総合文化学科には、日本語教員養成プログラムが用意されており、「国際交流を深く理解することのできる人材」の育成を目指している。このプログラムの修了認定には必要な科目の単位取得とともに「実習に関わる学習項目」の認定が求められている。このプログラムの修了認定を目指す学生は、日本語学校や地域の日本語教室でボランティアをおこなうなどして、「実習に関わる学習項目」の認定を受けてきたが、提携校との継続的交流を目指す試みがこれ

に該当するものと位置付けられるのであれば、このプログラムに登録する学生の選択肢が増えることにもつながる。

6 — おわりに

以上見てきたとおり、和光大学と提携校であるサバ大学との交流は、これまで教員間の交流を中心に進められており、学生には両校が提携校の関係にあるとの認識も希薄であるという現状が見られる。教員間の交流はもとより、学生間の交流には、今後に発展・深化の可能性が大きく残されているとも捉えられる。

交流の方法としては、同じ提携校である中国、上海大学から特別聴講生を受け入れてきたと同様、短期留学生としての受け入れという方法もあろう。実際、サバ大学の日本語履修者へのアンケート調査の結果からは、日本への留学を望む声も多く聞かれた。しかしながら、日本語担当教員へのインタビューの結果、日本語履修者の日本語能力、それに伴う和光大学における受け入れ態勢といったものを総合的に考えた場合、現段階での短期留学生の受け入れには、乗り越えるべき問題が少なくないことがわかった。

様々な要件が整えば、いずれ和光大学にサバ大学から留学生を迎える日も来ようかと思うが、ここで提案したインターネットを利用した交流であっても、やり方次第では学生間交流という目的は十分に達せられると思われる。今後は、その具体的な方法と可能性について、実践的な試みを通じてさらに検証を進めていきたい。

謝辞：本調査における質問紙の英訳は、和光大学経済経営学部教授加藤巖先生にお願いした。また、インタビューおよびアンケート調査の実施にあたっては、サバ大学への調査の申し入れの段階から、全面的にご協力をいただいた。加藤先生のご協力がなければ、本調査を実施することはできなかった。ここに深謝申し上げます。

《参考文献》

- 市川真矢（1997）「海外姉妹提携校との電子メール交換による交流の構想」『常葉学園短期大学紀要』28 pp.85-90
- 鈴木峰生（2006）「漢陽女子大学との姉妹校交流へのインターネット活用」*Bulletin of Seisenjogakuin Junior College*（清泉女学院短期大学研究紀要）25 pp.85-90
- 国際交流基金（2011）『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年』
- 田崎敦子（1998）「提携交換の夏期交換留学プログラムの意義と可能性—留学形態の多様化に向けて—」『広島大学留学生教育』3 pp.29-37
- 田崎敦子（1996）「大学における夏期交換プログラムの成果と課題—言語と行動の相乗作用—」*The Language Teacher* 7 pp.21-23

《参考資料》

サバ大学日本語履修者へのアンケート調査 和光大学 林 奈緒子 和光大学とサバ大学は、2006年以降、学術活動や学生の交流を通じて、提携校としての関係を深めてきました。両校ともに、今後この関係をさらに仲良くしていきたいと希望しています。和光大学では、サバ大学で日本語を学ぶ皆さんのご意見を伺い、皆さんの日本語の学習を支援し、両校の交流をより一層深めていきたいと考えています。アンケートにご協力くださるようお願いいたします。 年齢 () 歳 性別 男性 ・ 女性 学年 第 () 学年 質問1 普段のコミュニケーションで使用している言語は何ですか。当てはまるもの全てに○をつけてください。 1. マレー語 2. 中国語 3. タミル語 4. 𑂦𑂩𑂰𑂫𑂱𑂲𑂳𑂴𑂵𑂶𑂷𑂸𑂺𑂹𑂻𑂼𑂽𑂾𑂿𑃀𑃁𑃂𑃃𑃄𑃅𑃆𑃇𑃈𑃉𑃊𑃋𑃌𑃍𑃎𑃏𑃐𑃑𑃒𑃓𑃔𑃕𑃖𑃗𑃘𑃙𑃚𑃛𑃜𑃝𑃞𑃟𑃠𑃡𑃢𑃣𑃤𑃥𑃦𑃧𑃨𑃩𑃪𑃫𑃬𑃭𑃮𑃯𑃰𑃱𑃲𑃳𑃴𑃵𑃶𑃷𑃸𑃹𑃺𑃻𑃼𑃽𑃾𑃿𑄀𑄁𑄂𑄃𑄄𑄅𑄆𑄇𑄈𑄉𑄊𑄋𑄌𑄍𑄎𑄏𑄐𑄑𑄒𑄓𑄔𑄕𑄖𑄗𑄘𑄙𑄚𑄛𑄜𑄝𑄞𑄟𑄠𑄡𑄢𑄣𑄤𑄥𑄦𑄧𑄨𑄩𑄪𑄫𑄬𑄭𑄮𑄯𑄰𑄱𑄲𑄳𑄴𑄵𑄶𑄷𑄸𑄹𑄺𑄻𑄼𑄽𑄾𑄿𑅀𑅁𑅂𑅃𑅄𑅅𑅆𑅇𑅈𑅉𑅊𑅋𑅌𑅍𑅎𑅏𑅐𑅑𑅒𑅓𑅔𑅕𑅖𑅗𑅘𑅙𑅚𑅛𑅜𑅝𑅞𑅟𑅠𑅡𑅢𑅣𑅤𑅥𑅦𑅧𑅨𑅩𑅪𑅫𑅬𑅭𑅮𑅯𑅰𑅱𑅲𑅳𑅴𑅵𑅶𑅷𑅸𑅹𑅺𑅻𑅼𑅽𑅾𑅿𑆀𑆁𑆂𑆃𑆄𑆅𑆆𑆇𑆈𑆉𑆊𑆋𑆌𑆍𑆎𑆏𑆐𑆑𑆒𑆓𑆔𑆕𑆖𑆗𑆘𑆙𑆚𑆛𑆜𑆝𑆞𑆟𑆠𑆡𑆢𑆣𑆤𑆥𑆦𑆧𑆨𑆩𑆪𑆫𑆬𑆭𑆮𑆯𑆰𑆱𑆲𑆳𑆴𑆵𑆶𑆷𑆸𑆹𑆺𑆻𑆼𑆽𑆾𑆿𑇀𑇁𑇂𑇃𑇄𑇅𑇆𑇇𑇈𑇉𑇊𑇋𑇌𑇍𑇎𑇏𑇐𑇑𑇒𑇓𑇔𑇕𑇖𑇗𑇘𑇙𑇚𑇛𑇜𑇝𑇞𑇟𑇠𑇡𑇢𑇣𑇤𑇥𑇦𑇧𑇨𑇩𑇪𑇫𑇬𑇭𑇮𑇯𑇰𑇱𑇲𑇳𑇴𑇵𑇶𑇷𑇸𑇹𑇺𑇻𑇼𑇽𑇾𑇿𑈀𑈁𑈂𑈃𑈄𑈅𑈆𑈇𑈈𑈉𑈊𑈋𑈌𑈍𑈎𑈏𑈐𑈑𑈒𑈓𑈔𑈕𑈖𑈗𑈘𑈙𑈚𑈛𑈜𑈝𑈞𑈟𑈠𑈡𑈢𑈣𑈤𑈥𑈦𑈧𑈨𑈩𑈪𑈫𑈬𑈭𑈮𑈯𑈰𑈱𑈲𑈳𑈴𑈶𑈵𑈷𑈸𑈹𑈺𑈻𑈼𑈽𑈾𑈿𑉀𑉁𑉂𑉃𑉄𑉅𑉆𑉇𑉈𑉉𑉊𑉋𑉌𑉍𑉎𑉏𑉐𑉑𑉒𑉓𑉔𑉕𑉖𑉗𑉘𑉙𑉚𑉛𑉜𑉝𑉞𑉟𑉠𑉡𑉢𑉣𑉤𑉥𑉦𑉧𑉨𑉩𑉪𑉫𑉬𑉭𑉮𑉯𑉰𑉱𑉲𑉳𑉴𑉵𑉶𑉷𑉸𑉹𑉺𑉻𑉼𑉽𑉾𑉿𑊀𑊁𑊂𑊃𑊄𑊅𑊆𑊇𑊈𑊉𑊊𑊋𑊌𑊍𑊎𑊏𑊐𑊑𑊒𑊓𑊔𑊕𑊖𑊗𑊘𑊙𑊚𑊛𑊜𑊝𑊞𑊟𑊠𑊡𑊢𑊣𑊤𑊥𑊦𑊧𑊨𑊩𑊪𑊫𑊬𑊭𑊮𑊯𑊰𑊱𑊲𑊳𑊴𑊵𑊶𑊷𑊸𑊹𑊺𑊻𑊼𑊽𑊾𑊿𑋀𑋁𑋂𑋃𑋄𑋅𑋆𑋇𑋈𑋉𑋊𑋋𑋌𑋍𑋎𑋏𑋐𑋑𑋒𑋓𑋔𑋕𑋖𑋗𑋘𑋙𑋚𑋛𑋜𑋝𑋞𑋟𑋠𑋡𑋢𑋣𑋤𑋥𑋦𑋧𑋨𑋩𑋪𑋫𑋬𑋭𑋮𑋯𑋰𑋱𑋲𑋳𑋴𑋵𑋶𑋷𑋸𑋹𑋺𑋻𑋼𑋽𑋾𑋿𑌀𑌁𑌂𑌃𑌄𑌅𑌆𑌇𑌈𑌉𑌊𑌋𑌌𑌍𑌎𑌏𑌐𑌑𑌒𑌓𑌔𑌕𑌖𑌗𑌘𑌙𑌚𑌛𑌜𑌝𑌞𑌟𑌠𑌡𑌢𑌣𑌤𑌥𑌦𑌧𑌨𑌩𑌪𑌫𑌬𑌭𑌮𑌯𑌰𑌱𑌲𑌳𑌴𑌵𑌶𑌷𑌸𑌹𑌺𑌻𑌼𑌽𑌾𑌿𑍀𑍁𑍂𑍃𑍄𑍅𑍆𑍇𑍈𑍉𑍊𑍋𑍌𑍍𑍎𑍏𑍐𑍑𑍒𑍓𑍔𑍕𑍖𑍗𑍘𑍙𑍚𑍛𑍜𑍝𑍞𑍟𑍠𑍡𑍢𑍣𑍤𑍥𑍦𑍧𑍨𑍩𑍪𑍫𑍬𑍭𑍮𑍯𑍰𑍱𑍲𑍳𑍴𑍵𑍶𑍷𑍸𑍹𑍺𑍻𑍼𑍽𑍾𑍿𑎀𑎁𑎂𑎃𑎄𑎅𑎆𑎇𑎈𑎉𑎊𑎋𑎌𑎍𑎎𑎏𑎐𑎑𑎒𑎓𑎔𑎕𑎖𑎗𑎘𑎙𑎚𑎛𑎜𑎝𑎞𑎟𑎠𑎡𑎢𑎣𑎤𑎥𑎦𑎧𑎨𑎩𑎪𑎫𑎬𑎭𑎮𑎯𑎰𑎱𑎲𑎳𑎴𑎵𑎶𑎷𑎸𑎹𑎺𑎻𑎼𑎽𑎾𑎿𑏀𑏁𑏂𑏃𑏄𑏅𑏆𑏇𑏈𑏉𑏊𑏋𑏌𑏍𑏎𑏏𑏐𑏑𑏒𑏓𑏔𑏕𑏖𑏗𑏘𑏙𑏚𑏛𑏜𑏝𑏞𑏟𑏠𑏡𑏢𑏣𑏤𑏥𑏦𑏧𑏨𑏩𑏪𑏫𑏬𑏭𑏮𑏯𑏰𑏱𑏲𑏳𑏴𑏵𑏶𑏷𑏸𑏹𑏺𑏻𑏼𑏽𑏾𑏿𑐀𑐁𑐂𑐃𑐄𑐅𑐆𑐇𑐈𑐉𑐊𑐋𑐌𑐍𑐎𑐏𑐐𑐑𑐒𑐓𑐔𑐕𑐖𑐗𑐘𑐙𑐚𑐛𑐜𑐝𑐞𑐟𑐠𑐡𑐢𑐣𑐤𑐥𑐦𑐧𑐨𑐩𑐪𑐫𑐬𑐭𑐮𑐯𑐰𑐱𑐲𑐳𑐴𑐵𑐶𑐷𑐸𑐹𑐺𑐻𑐼𑐽𑐾𑐿𑑀𑑁𑑂𑑃𑑄𑑅𑑆𑑇𑑈𑑉𑑊𑑋𑑌𑑍𑑎𑑏𑑐𑑑𑑒𑑓𑑔𑑕𑑖𑑗𑑘𑑙𑑚𑑛𑑜𑑝𑑞𑑟𑑠𑑡𑑢𑑣𑑤𑑥𑑦𑑧𑑨𑑩𑑪𑑫𑑬𑑭𑑮𑑯𑑰𑑱𑑲𑑳𑑴𑑵𑑶𑑷𑑸𑑹𑑺𑑻𑑼𑑽𑑾𑑿𑒀𑒁𑒂𑒃𑒄𑒅𑒆𑒇𑒈𑒉𑒊𑒋𑒌𑒍𑒎𑒏𑒐𑒑𑒒𑒓𑒔𑒕𑒖𑒗𑒘𑒙𑒚𑒛𑒜𑒝𑒞𑒟𑒠𑒡𑒢𑒣𑒤𑒥𑒦𑒧𑒨𑒩𑒪𑒫𑒬𑒭𑒮𑒯𑒰𑒱𑒲𑒳𑒴𑒵𑒶𑒷𑒸𑒻𑒻𑒼𑒽𑒾𑒿𑓀𑓁𑓃𑓂𑓄𑓅𑓆𑓇𑓈𑓉𑓊𑓋𑓌𑓍𑓎𑓏𑓐𑓑𑓒𑓓𑓔𑓕𑓖𑓗𑓘𑓙𑓚𑓛𑓜𑓝𑓞𑓟𑓠𑓡𑓢𑓣𑓤𑓥𑓦𑓧𑓨𑓩𑓪𑓫𑓬𑓭𑓮𑓯𑓰𑓱𑓲𑓳𑓴𑓵𑓶𑓷𑓸𑓹𑓺𑓻𑓼𑓽𑓾𑓿𑔀𑔁𑔂𑔃𑔄𑔅𑔆𑔇𑔈𑔉𑔊𑔋𑔌𑔍𑔎𑔏𑔐𑔑𑔒𑔓𑔔𑔕𑔖𑔗𑔘𑔙𑔚𑔛𑔜𑔝𑔞𑔟𑔠𑔡𑔢𑔣𑔤𑔥𑔦𑔧𑔨𑔩𑔪𑔫𑔬𑔭𑔮𑔯𑔰𑔱𑔲𑔳𑔴𑔵𑔶𑔷𑔸𑔹𑔺𑔻𑔼𑔽𑔾𑔿𑕀𑕁𑕂𑕃𑕄𑕅𑕆𑕇𑕈𑕉𑕊𑕋𑕌𑕍𑕎𑕏𑕐𑕑𑕒𑕓𑕔𑕕𑕖𑕗𑕘𑕙𑕚𑕛𑕜𑕝𑕞𑕟𑕠𑕡𑕢𑕣𑕤𑕥𑕦𑕧𑕨𑕩𑕪𑕫𑕬𑕭𑕮𑕯𑕰𑕱𑕲𑕳𑕴𑕵𑕶𑕷𑕸𑕹𑕺𑕻𑕼𑕽𑕾𑕿𑖀𑖁𑖂𑖃𑖄𑖅𑖆𑖇𑖈𑖉𑖊𑖋𑖌𑖍𑖎𑖏𑖐𑖑𑖒𑖓𑖔𑖕𑖖𑖗𑖘𑖙𑖚𑖛𑖜𑖝𑖞𑖟𑖠𑖡𑖢𑖣𑖤𑖥𑖦𑖧𑖨𑖩𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥𑗦𑗧𑗨𑗩𑗪𑗫𑗬𑗭𑗮𑗯𑗰𑗱𑗲𑗳𑗴𑗵𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈𑘉𑘊𑘋𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛𑘜𑘝𑘞𑘟𑘠𑘡𑘢𑘣𑘤𑘥𑘦𑘧𑘨𑘩𑘪𑘫𑘬𑘭𑘮𑘯𑘰𑘱𑘲𑘳𑘴𑘵𑘶𑘷𑘸𑘹𑘺𑘻𑘼𑘽𑘾𑘿𑙀𑙁𑙂𑙃𑙄𑙅𑙆𑙇𑙈𑙉𑙊𑙋𑙌𑙍𑙎𑙏𑙐𑙑𑙒𑙓𑙔𑙕𑙖𑙗𑙘𑙙𑙚𑙛𑙜𑙝𑙞𑙟𑙠𑙡𑙢𑙣𑙤𑙥𑙦𑙧𑙨𑙩𑙪𑙫𑙬𑙭𑙮𑙯𑙰𑙱𑙲𑙳𑙴𑙵𑙶𑙷𑙸𑙹𑙺𑙻𑙼𑙽𑙾𑙿𑚀𑚁𑚂𑚃𑚄𑚅𑚆𑚇𑚈𑚉𑚊𑚋𑚌𑚍𑚎𑚏𑚐𑚑𑚒𑚓𑚔𑚕𑚖𑚗𑚘𑚙𑚚𑚛𑚜𑚝𑚞𑚟𑚠𑚡𑚢𑚣𑚤𑚥𑚦𑚧𑚨𑚩𑚪𑚫𑚬𑚭𑚮𑚯𑚰𑚱𑚲𑚳𑚴𑚵𑚷𑚶𑚸𑚹𑚺𑚻𑚼𑚽𑚾𑚿𑛀𑛁𑛂𑛃𑛄𑛅𑛆𑛇𑛈𑛉𑛊𑛋𑛌𑛍𑛎𑛏𑛐𑛑𑛒𑛓𑛔𑛕𑛖𑛗𑛘𑛙𑛚𑛛𑛜𑛝𑛞𑛟𑛠𑛡𑛢𑛣𑛤𑛥𑛦𑛧𑛨𑛩𑛪𑛫𑛬𑛭𑛮𑛯𑛰𑛱𑛲𑛳𑛴𑛵𑛶𑛷𑛸𑛹𑛺𑛻𑛼𑛽𑛾𑛿𑜀𑜁𑜂𑜃𑜄𑜅𑜆𑜇𑜈𑜉𑜊𑜋𑜌𑜍𑜎𑜏𑜐𑜑𑜒𑜓𑜔𑜕𑜖𑜗𑜘𑜙𑜚𑜛𑜜𑜝𑜞𑜟𑜠𑜡𑜢𑜣𑜤𑜥𑜦𑜧𑜨𑜩𑜪𑜫𑜬𑜭𑜮𑜯𑜰𑜱𑜲𑜳𑜴𑜵𑜶𑜷𑜸𑜹𑜺𑜻𑜼𑜽𑜾𑜿𑝀𑝁𑝂𑝃𑝄𑝅𑝆𑝇𑝈𑝉𑝊𑝋𑝌𑝍𑝎𑝏𑝐𑝑𑝒𑝓𑝔𑝕𑝖𑝗𑝘𑝙𑝚𑝛𑝜𑝝𑝞𑝟𑝠𑝡𑝢𑝣𑝤𑝥𑝦𑝧𑝨𑝩𑝪𑝫𑝬𑝭𑝮𑝯𑝰𑝱𑝲𑝳𑝴𑝵𑝶𑝷𑝸𑝹𑝺𑝻𑝼𑝽𑝾𑝿𑞀𑞁𑞂𑞃𑞄𑞅𑞆𑞇𑞈𑞉𑞊𑞋𑞌𑞍𑞎𑞏𑞐𑞑𑞒𑞓𑞔𑞕𑞖𑞗𑞘𑞙𑞚𑞛𑞜𑞝𑞞𑞟𑞠𑞡𑞢𑞣𑞤𑞥𑞦𑞧𑞨𑞩𑞪𑞫𑞬𑞭𑞮𑞯𑞰𑞱𑞲𑞳𑞴𑞵𑞶𑞷𑞸𑞹𑞺𑞻𑞼𑞽𑞾𑞿𑟀𑟁𑟂𑟃𑟄𑟅𑟆𑟇𑟈𑟉𑟊𑟋𑟌𑟍𑟎𑟏𑟐𑟑𑟒𑟓𑟔𑟕𑟖𑟗𑟘𑟙𑟚𑟛𑟜𑟝𑟞𑟟𑟠𑟡𑟢𑟣𑟤𑟥𑟦𑟧𑟨𑟩𑟪𑟫𑟬𑟭𑟮𑟯𑟰𑟱𑟲𑟳𑟴𑟵𑟶𑟷𑟸𑟹𑟺𑟻𑟼𑟽𑟾𑟿𑠀𑠁𑠂𑠃𑠄𑠅𑠆𑠇𑠈𑠉𑠊𑠋𑠌𑠍𑠎𑠏𑠐𑠑𑠒𑠓𑠔𑠕𑠖𑠗𑠘𑠙𑠚𑠛𑠜𑠝𑠞𑠟𑠠𑠡𑠢𑠣𑠤𑠥𑠦𑠧𑠨𑠩𑠪𑠫𑠬𑠭𑠮𑠯𑠰𑠱𑠲𑠳𑠴𑠵𑠶𑠷𑠸𑠺𑠹𑠻𑠼𑠽𑠾𑠿𑡀𑡁𑡂𑡃𑡄𑡅𑡆𑡇𑡈𑡉𑡊𑡋𑡌𑡍𑡎𑡏𑡐𑡑𑡒𑡓𑡔𑡕𑡖𑡗𑡘𑡙𑡚𑡛𑡜𑡝𑡞𑡟𑡠𑡡𑡢𑡣𑡤𑡥𑡦𑡧𑡨𑡩𑡪𑡫𑡬𑡭𑡮𑡯𑡰𑡱𑡲𑡳𑡴𑡵𑡶𑡷𑡸𑡹𑡺𑡻𑡼𑡽𑡾𑡿𑢀𑢁𑢂𑢃𑢄𑢅𑢆𑢇𑢈𑢉𑢊𑢋𑢌𑢍𑢎𑢏𑢐𑢑𑢒𑢓𑢔𑢕𑢖𑢗𑢘𑢙𑢚𑢛𑢜𑢝𑢞𑢟𑢠𑢡𑢢𑢣𑢤𑢥𑢦𑢧𑢨𑢩𑢪𑢫𑢬𑢭𑢮𑢯𑢰𑢱𑢲𑢳𑢴𑢵𑢶𑢷𑢸𑢹𑢺𑢻𑢼𑢽𑢾𑢿𑣀𑣁𑣂𑣃𑣄𑣅𑣆𑣇𑣈𑣉𑣊𑣋𑣌𑣍𑣎𑣏𑣐𑣑𑣒𑣓𑣔𑣕𑣖𑣗𑣘𑣙𑣚𑣛𑣜𑣝𑣞𑣟𑣠𑣡𑣢𑣣𑣤𑣥𑣦𑣧𑣨𑣩𑣪𑣫𑣬𑣭𑣮𑣯𑣰𑣱𑣲𑣳𑣴𑣵𑣶𑣷𑣸𑣹𑣺𑣻𑣼𑣽𑣾𑣿𑤀𑤁𑤂𑤃𑤄𑤅𑤆𑤇𑤈𑤉𑤊𑤋𑤌𑤍𑤎𑤏𑤐𑤑𑤒𑤓𑤔𑤕𑤖𑤗𑤘𑤙𑤚𑤛𑤜𑤝𑤞𑤟𑤠𑤡𑤢𑤣𑤤𑤥𑤦𑤧𑤨𑤩𑤪𑤫𑤬𑤭𑤮𑤯𑤰𑤱𑤲𑤳𑤴𑤵𑤶𑤷𑤸𑤹𑤺𑤻𑤼𑤽𑤾𑤿𑥀𑥁𑥂𑥃𑥄𑥅𑥆𑥇𑥈𑥉𑥊𑥋𑥌𑥍𑥎𑥏𑥐𑥑𑥒𑥓𑥔𑥕𑥖𑥗𑥘𑥙𑥚𑥛𑥜𑥝𑥞𑥟𑥠𑥡𑥢𑥣𑥤𑥥𑥦𑥧𑥨𑥩𑥪𑥫𑥬𑥭𑥮𑥯𑥰𑥱𑥲𑥳𑥴𑥵𑥶𑥷𑥸𑥹𑥺𑥻𑥼𑥽𑥾𑥿𑦀𑦁𑦂𑦃𑦄𑦅𑦆𑦇𑦈𑦉𑦊𑦋𑦌𑦍𑦎𑦏𑦐𑦑𑦒𑦓𑦔𑦕𑦖𑦗𑦘𑦙𑦚𑦛𑦜𑦝𑦞𑦟𑦠𑦡𑦢𑦣𑦤𑦥𑦦𑦧𑦨𑦩𑦪𑦫𑦬𑦭𑦮𑦯𑦰𑦱𑦲𑦳𑦴𑦵𑦶𑦷𑦸𑦹𑦺𑦻𑦼𑦽𑦾𑦿𑧀𑧁𑧂𑧃𑧄𑧅𑧆𑧇𑧈𑧉𑧊𑧋𑧌𑧍𑧎𑧏𑧐𑧑𑧒𑧓𑧔𑧕𑧖𑧗𑧘𑧙𑧚𑧛𑧜𑧝𑧞𑧟𑧠𑧡𑧢𑧣𑧤𑧥𑧦𑧧𑧨𑧩𑧪𑧫𑧬𑧭𑧮𑧯𑧰𑧱𑧲𑧳𑧴𑧵𑧶𑧷𑧸𑧹𑧺𑧻𑧼𑧽𑧾𑧿𑨀𑨁𑨂𑨃𑨄𑨅𑨆𑨇𑨈𑨉𑨊𑨋𑨌𑨍𑨎𑨏𑨐𑨑𑨒𑨓𑨔𑨕𑨖𑨗𑨘𑨙𑨚𑨛𑨜𑨝𑨞𑨟𑨠𑨡𑨢𑨣𑨤𑨥𑨦𑨧𑨨𑨩𑨪𑨫𑨬𑨭𑨮𑨯𑨰𑨱𑨲𑨳𑨴𑨵𑨶𑨷𑨸𑨹𑨺𑨻𑨼𑨽𑨾𑨿𑩀𑩁𑩂𑩃𑩄𑩅𑩆𑩇𑩈𑩉𑩊𑩋𑩌𑩍𑩎𑩏𑩐𑩑𑩒𑩓𑩔𑩕𑩖𑩗𑩘𑩙𑩚𑩛𑩜𑩝𑩞𑩟𑩠𑩡𑩢𑩣𑩤𑩥𑩦𑩧𑩨𑩩𑩪𑩫𑩬𑩭𑩮𑩯𑩰𑩱𑩲𑩳𑩴𑩵𑩶𑩷𑩸𑩹𑩺𑩻𑩼𑩽𑩾𑩿𑪀𑪁𑪂𑪃𑪄𑪅𑪆𑪇𑪈𑪉𑪊𑪋𑪌𑪍𑪎𑪏𑪐𑪑𑪒𑪓𑪔𑪕𑪖𑪗𑪘𑪙𑪚𑪛𑪜𑪝𑪞𑪟𑪠𑪡𑪢𑪣𑪤𑪥𑪦𑪧𑪨𑪩𑪪𑪫𑪬𑪭𑪮𑪯𑪰𑪱𑪲𑪳𑪴𑪵𑪶𑪷𑪸𑪹𑪺𑪻𑪼𑪽𑪾𑪿𑫀𑫁𑫂𑫃𑫄𑫅𑫆𑫇𑫈𑫉𑫊𑫋𑫌𑫍𑫎𑫏𑫐𑫑𑫒𑫓𑫔𑫕𑫖𑫗𑫘𑫙𑫚𑫛𑫜𑫝𑫞𑫟𑫠𑫡𑫢𑫣𑫤𑫥𑫦𑫧𑫨𑫩𑫪𑫫𑫬𑫭𑫮𑫯𑫰𑫱𑫲𑫳𑫴𑫵𑫶𑫷𑫸𑫹𑫺𑫻𑫼𑫽𑫾𑫿𑬀𑬁𑬂𑬃𑬄𑬅𑬆𑬇𑬈𑬉𑬊𑬋𑬌𑬍𑬎𑬏𑬐𑬑𑬒𑬓𑬔𑬕𑬖𑬗𑬘𑬙𑬚𑬛𑬜𑬝𑬞𑬟𑬠𑬡𑬢𑬣𑬤𑬥𑬦𑬧𑬨𑬩𑬪𑬫𑬬𑬭𑬮𑬯𑬰𑬱𑬲𑬳𑬴𑬵𑬶𑬷𑬸𑬹𑬺𑬻𑬼𑬽𑬾𑬿𑭀𑭁𑭂𑭃𑭄𑭅𑭆𑭇𑭈𑭉𑭊𑭋𑭌𑭍𑭎𑭏𑭐𑭑𑭒𑭓𑭔𑭕𑭖𑭗𑭘𑭙𑭚𑭛𑭜𑭝𑭞𑭟𑭠𑭡𑭢𑭣𑭤𑭥𑭦𑭧𑭨𑭩𑭪𑭫𑭬𑭭𑭮𑭯𑭰𑭱𑭲𑭳𑭴𑭵𑭶𑭷𑭸𑭹𑭺𑭻𑭼𑭽𑭾𑭿𑮀𑮁𑮂𑮃𑮄𑮅𑮆𑮇𑮈𑮉𑮊𑮋𑮌𑮍𑮎𑮏𑮐𑮑𑮒𑮓𑮔𑮕𑮖𑮗𑮘𑮙𑮚𑮛𑮜𑮝𑮞𑮟𑮠𑮡𑮢𑮣𑮤𑮥𑮦𑮧𑮨𑮩𑮪𑮫𑮬𑮭𑮮𑮯𑮰𑮱𑮲𑮳𑮴𑮵𑮶𑮷𑮸𑮹𑮺𑮻𑮼𑮽𑮾𑮿𑯀𑯁𑯂𑯃𑯄𑯅𑯆𑯇𑯈𑯉𑯊𑯋𑯌𑯍𑯎𑯏𑯐𑯑𑯒𑯓𑯔𑯕𑯖𑯗𑯘𑯙𑯚𑯛𑯜𑯝𑯞𑯟𑯠𑯡𑯢𑯣𑯤𑯥𑯦𑯧𑯨𑯩𑯪𑯫𑯬𑯭𑯮𑯯𑯰𑯱𑯲𑯳𑯴𑯵𑯶𑯷𑯸𑯹𑯺𑯻𑯼𑯽𑯾𑯿𑰀𑰁𑰂𑰃𑰄𑰅𑰆𑰇𑰈𑰉𑰊𑰋𑰌𑰍𑰎𑰏𑰐𑰑𑰒𑰓𑰔𑰕𑰖𑰗𑰘𑰙𑰚𑰛𑰜𑰝𑰞𑰟𑰠𑰡𑰢𑰣𑰤𑰥𑰦𑰧𑰨𑰩𑰪𑰫𑰬𑰭𑰮𑰯𑰰𑰱𑰲𑰳𑰴𑰵𑰶𑰷𑰸𑰹𑰺𑰻𑰼𑰽𑰾𑰿𑱀𑱁𑱂𑱃𑱄𑱅𑱆𑱇𑱈𑱉𑱊𑱋𑱌𑱍𑱎𑱏𑱐𑱑𑱒𑱓𑱔𑱕𑱖𑱗𑱘𑱙𑱚𑱛𑱜𑱝𑱞𑱟𑱠𑱡𑱢𑱣𑱤𑱥𑱦𑱧𑱨𑱩𑱪𑱫𑱬𑱭𑱮𑱯𑱰𑱱𑱲𑱳
--